市民新聞グループ 岡谷市民新聞・下諏訪市民新聞・諏訪市民新聞・茅野市民新聞・たつの新聞・みのわ新聞・南みのわ新聞共通版

ふるさとのお宝再発見 ㊳

市民新聞グループの土曜特集

週刊 見る

この特集をさらにご希望の方は、新聞販売店かお近くのコンビニでお求め下さい

今井十五社拝殿などの社殿建築・彫刻

彫刻 宝尽くし！

岡谷市ほか

見過ごしがちな彫刻あれこれ

本特集は「ふるさとのお宝再発見」です。そこでお宝にちなんで神社建築や山車に彫刻されたお宝「宝尽くし」を紹介してみたいと思います。

いつも何気なく見ていながら、見過ごしている彫刻にはそれぞれに込められた深い意味があります。それは祭神への守護であったり、縁起であったり、故事や歴史、教訓、深遠な願いを込めた装飾であったり、何かを暗示、連想させるものであったりします。

彫刻の持っている、それぞれの意味合いについては改めて詳述させていただきます。

写真①は北斎漫画の1枚、写真②は尾形光琳図案宝船の1枚、写真③は宝船の香合です。

いろいろな、お宝が紹介されています。

北斎漫画の左上から

宝巻（巻物）…絵巻物・教典や秘伝の書

宝やく（錠）…お宝を厳重にしまっておく。蔵の鍵があればお宝を持ち出せる

隠れ笠…かぶると姿が消えて見えなくなる

小判・千両箱…現金が一番か

宝珠の玉…タマネギ状の金銀財宝が望むとき出せるという不思議な珠

打出の小槌…願い事をしながら振ると願いが叶う。大黒様が持っている

金嚢（キンノウ）…巾着の事で 銭貨やお守り、香料を入れる

反物…高級な反物はやはりお宝か

古銭、硬貨…せんたくバサミみたいなのは、中国の古銭です

七宝…仏教では金、銀、瑠璃、玻璃、硨磲（シャコ）、珊瑚、瑪瑙の七つ。法華経では、珊瑚、瑪瑙の代わりに真珠、まいかいの七つの宝を指す。七宝紋（画像A）は円形を4分の1ずつ交差させ網状に連ねた紋様で無限に連鎖する平和や円満、「世界中の財宝」や「無限の子孫繁栄」を意味している事から、「七宝に花角」紋様がお宝になっていると思われる

分銅…宝物の重さを量ったか

丁子（チョウジ）…南洋の果物クローブ、つぼみの時に乾燥した物を丁香といい、香料、医薬品として珍重された。屋号に丁子屋とか、紋様に丁子紋（画像B）がある。古代中国で皇帝の前に出る時口に含んで口臭を消したといわれている。見た事がなかったが岡谷来々軒のカウンターに置いてあってびっくりした（写真④⑤）

犀角（サイカク）…犀の角でできた酒杯。毒が注がれると変色して難を知らせるという。正倉院にあるようでネットで見る事ができる。丁子と犀角は絵柄が混同されているが、犀角が江戸時代は一般人にはなじみがなく見たことがないためと思われる

隠れ蓑…隠れ笠と同じで着ると姿が消えて見えなくなる

軍配…振れば 人事は思いのままか

ここにはありませんが

米俵や珊瑚…これもお宝です

ドラえもんのポケット…現代ならこれもお宝の仲間入りだが

①

「葛飾北斎 北斎漫画」（芸艸堂発行）より引用

②

「尾形光琳 光琳図案」（芸艸堂発行）より引用

③

宝舟の香合、巻物、米俵、宝珠、打出の小槌、隠れ笠、丁子などの宝物が宝舟にのっている

画像A（七宝紋）

画像B（丁子紋）

④

⑤

④来々軒のカウンターの上に置かれていた丁子。香辛料の1つとして紹介されていた（⑤は拡大）

⑥

今井十五社の拝殿の向拝の水引虹梁の上の宝尽くし。左から丁子、隠れ笠、隠れ蓑、金嚢（巾着）、打出の小槌、宝珠、巻物

隠された「お宝」社殿彫刻

さて写真⑥は岡谷市今井十五社の拝殿の向拝の水引虹梁の上の宝尽くし。今井十五社拝殿は1919（大正8）年の竣（しゅん）工。本殿は1863（文久3）年、今井萬蔵、大隅流石田房之進昭房、矢崎善司昭恭らによる。境内には諏訪地方では珍しい懸造（かけづく）りの舞屋や津島神社がありそれぞれ岡谷市有形文化財になっている。

⑧

⑦

⑦半田の山車（護王車）の「ネズミと宝尽くし」。打出の小槌、宝珠の玉、分銅などの宝物とネズミが彫られている（⑧参照）

写真⑦⑧は昨年12月に下諏訪町の諏訪湖博物館で飾られた半田の山車（護王車）の下方に見られる「ネズミと宝尽くし」。俵、巾着、隠れ笠、分銅、宝珠の玉、七宝が見える。ネズミは大黒様のつかいといわれている。

写真⑨⑩は、湖南の習焼神社弊拝殿の向拝虹梁上の宝尽くし。弊拝殿は1898（明治31）年伊藤作蔵、本殿は1754年（宝暦4）の建築。金嚢、小槌、宝珠、丁子が見える。

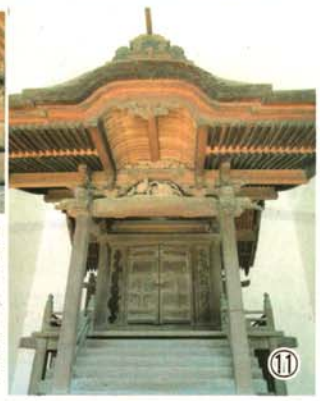
⑩

⑨

向拝虹梁上の宝尽くし。左から宝珠の玉、隠れ蓑、宝やく（錠）、分銅、犀角、隠れ笠、打出の小槌、金嚢などが並んでいるのが見える

習焼神社弊拝殿

⑫



⑪

⑪矢嶋天伯社の向拝虹梁上（⑫は拡大）の立川得意の「粟穂に鶉」とその上の宝尽くし

写真⑪⑫は茅野市横内の矢嶋天伯社。2代立川和四郎冨昌が1850（嘉永3）年に造った。向拝の虹梁の上は立川得意の「粟穂に鶉」でその上の桁（けた）の上に宝尽くしが見える。覆屋（おおいや）で厳重に保護されていて下からのぞき込まないと見えないが、品のよい小さな小槌、笠、宝珠、巾着が見える。

昨今、消費増税や電気ガス諸物価高騰の折、夢見が悪い日が続きますが、せめて宝尽くしの記事を枕の下に忍ばせて、一夜、お宝に囲まれた夢を見たいものです。青い空に白い雲、山笑うというさわやかな芽吹きの5月。水が張られた田んぼの脇道を、近くの氏神様へ宝探しの散策をお楽しみ下さい。

筆者注

※画像Aの七宝紋、画像Bの丁子紋の二つの画像は、ともに「日本の家紋七〇〇〇」（新人物往来社）からの引用です。

※冨悖の「あつ」は一般には悖の字が使われていますが本人の彫刻には悖の字が彫られているため悖の字を充てた。

（岡谷市文化財保護審議会委員、諏訪市文化財専門審議会委員で、諏訪総合設計代表の宮坂正博さんに執筆していただきました）

次回は坂本養川と堰について紹介します。

⑭

高台裏面には松に七宝花角が彫られている

⑬

4代立川冨悖（あつ）の床置きの宝尽くし（台の高さ19センチ、幅33・3センチ、奥行き20・8センチ）

大隅、立川に係わらず縁起のよいこととして彫られた宝尽くし。

冨昌は1836（天保7）年、立科町の津金寺妙見堂の唐破風の内側に打出の小槌、巾着などを彫刻している。